

第三節 戦国（織豊）時代の宗教文化

第一項 浄土真宗の伸張

真宗高田派の展開 室町時代の後半から、浄土真宗の教線がこの地域に広がった。その始まりは、親鸞しんらんの高弟の真仏しんぶつを祖とする専修寺せんじゅじの動きである。専修寺は下野国高田しもつけ たかだ（栃木県二宮町にのみや）の地で法統をつたえていたものの、永享六年（一四三四）第十世真慧しんねが誕生し大きな転機を迎える。真慧は長祿三年（一四五九）高田の地を出て、近江へ向かった。そして、寛正元年（一四六〇）には伊勢国に入り、真宗高田派の教えを広めたのであった。

真慧はまず朝明郡大矢知おおやち（四日市市）に光明寺を建て、さらに三重郡北小松村（四日市市）に中山寺を建てた（後に中山寺は南小松村に移転し現在に至る）。次いで鈴鹿郡山本村（鈴鹿市山本町）に居を移し教化を続け、現在の西岸寺の基礎を築いた。また原村（鈴鹿市東庄内町）には吉尾道場をひらき、津市周辺の弟子達が参集したという（史713、「恵輪記」『真宗史料集成』四）。現在も東庄内町坊山には、中世城郭の様な土盛が残っており、往時をしのばせる。真慧は野袈裟のげさなどの葬送具を広め、多くの人に葬礼を受けさせる機会を提供したという。現在でも高田派の葬儀では、棺に野袈裟が掛けられている。

原に集まった真慧の弟子達は、新たに「直参」として取り立てられた人々である。元来、伊勢国には三日市（鈴鹿市三日市町）や安濃津（津市柳山）を中心とした、専修寺せんじゅじと関係の深い坊主の集団があったが、それらとは関係なしに直接に真慧が門末を受け入れ軋轢が生じた。真慧はこれらの軋轢を処理しつつ、教化を進めていった。

寛正五年（一四六四）専修寺真慧は吉尾を退き近江に向かったが、伊勢国の門徒とのつながりは絶えることなく、親鸞の命

日である毎月二十八日には仏事料を銭二貫文づつ坂本の真慧のもとに贈ったという(史721)。真慧が出国した理由は定かではないが、領主であった峯氏との確執があったと考えられている。あるいは、この年父が亡くなり専修寺を継いだことも影響しているかもしれない。真慧は近江に至った後、加賀へ向かった。そして、再び伊勢国の門徒に招かれ現在の地一身田(津市一身田町)に至り、文明七年(一四七五)頃に坊舎を建立したとされる。

この頃の真慧の活動を示す品が、福泉寺(東町)に伝わる。真慧の手になる、「南無不可思議光如来」という九字名号、善導・源空(法然)・親鸞・真仏以下、真慧自身につながる法脈を記した永正二年(一五〇五)の軸である(史834 写真181)。中国の浄土僧善導や法然、親鸞が伝えた阿弥陀信仰を、真慧が伝えていることを示した法物といえる。

永正九年(一五一一)真慧は亡くなった。死後、その子応真と、宮家から養子として入寺した真智の間で正統の争いがあった。最終的に一身田に残ったのが応真であり、その後堯恵、堯真と継職し近世の高田派教団となっていく。文禄三年(一五九四)に光養坊の坊号を下付した事例が知られる(川崎町、現在の西願寺)。また法専寺には文禄二年(一五九三)に堯真より阿弥陀如来の絵像が下付されたといわれる(『鈴鹿郡中庄村地誌』)。一方で、真智に与した門末も存在した。伊勢国でも真智派の寺院が存在し、江戸期まで分裂状況が続いた(『河芸町史』文化編)。

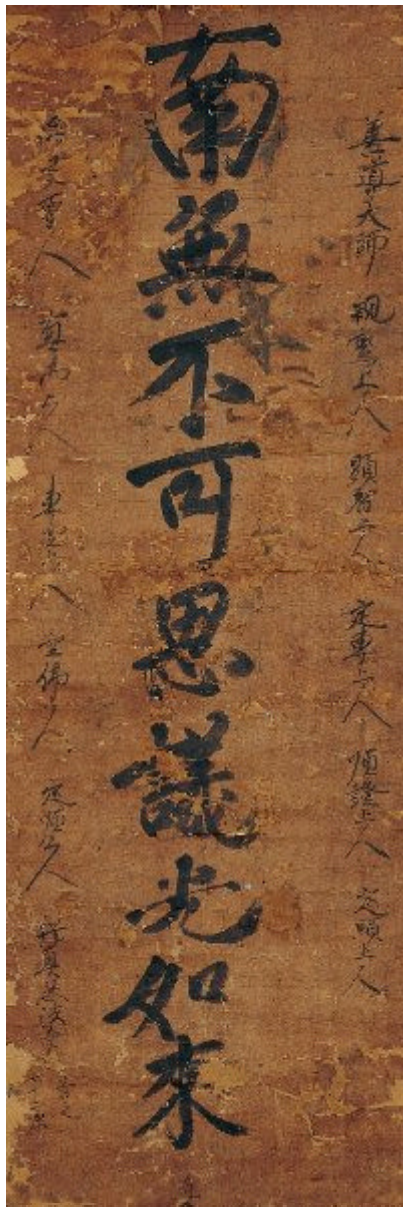


写真181 九字名号
(福泉寺所蔵)

真宗本願寺派の展開

高田派の真慧と対照させて語られるの

が、本願寺の中興蓮如（れんによ）（応永二十二年〔一四一五〕）（明応八年〔一四九九〕）による教化である。しかしながら、伊勢国で史料的に多く確認できるのは蓮如の子実如（じつじよ）（長祿二年〔一四五八〕）（大永五年〔一五二五〕）の活動である。龜山市域でも、実如が末寺に下付した法物が確認できる。

永正十二年（一五二五）年本願寺実如が下付した方便法身尊像（ほうべんほっしんそんぞう）を、真宗大谷派安田山正宝寺（中庄町）が有している。方便法身尊像とは、阿弥陀仏の絵像で軸に仕立てられたものである。軸の裏に下付の年月日、下付した人物、下付された寺院あるいは人物が記されている。正宝寺の方便法身尊像には「立田最」「空泰下勢州安芸郡昼生中庄」、「願主」「」と記される（史842）。願主の名は欠損により不明であるが、「立田最」「」の空泰という僧侶のもとに編成されていることは理解できる。上寺と下寺、本寺と末寺の関係である。おそらく欠落部分には、「勝寺」の二字が入るだろう。伊勢国立田（辰田）の最勝寺（さいしやうじ）は、この地域の有力な本願寺派寺院である。現在、立田は愛知県愛西市の地名であるが、中世においては伊勢国の地名として認識されていた。最勝寺は、現在桑名市萱町に位置している。

同様に実如から下付された方便法身尊像が、中庄の浄土真宗本願寺派竜田山西正寺（中庄町）に伝わる。こちらは、永正十八年（一五二二）年に「立田西勝寺門徒空賢下勢州奄芸郡昼生」の「願主釈空養」に宛てられている（史844）。最勝寺は西勝寺と同じ寺院を指している。

また、大永三年（一五二三）年に実如から下付された方便法身尊像が、浄土真宗本願寺派柳木山三宝寺（三寺町）に残る。そこには「興正寺門徒柳堂下安芸郡昼生三寺願主釈西玠」（こうしやうじもんじやなきじやう）と記される（史848）。興正寺とは現在も西本願寺の真横にある寺院で、江戸時代以前は西本願寺、織豊期以前は本願寺最大の末寺にして、多数の孫末寺を有する存在であった。また柳堂（やなきじやう）は阿弥陀寺ともよばれていたが、後に法盛寺（ほうじやうじ）と名乗る。明治

期になり興正寺が西本願寺から独立した際、西本願寺に残り現在も真宗本願寺派の寺院として桑名市萱町に存在している。すなわち、本願寺の末寺の興正寺の、そのまた末寺の柳堂の、そのまた末寺の西玠に、本願寺から阿弥陀像が下付されたのである。

最勝寺・法盛寺はともに桑名にあり、その門末が後の長島一向一揆で重要な役割を果たす本願寺の一族寺院願証寺がんしょうじを支えた（と想定される。他に願証寺を支えた寺院としては、香取（桑名市）の法泉寺ほうせんじがある。法泉寺の住持は「空」を通字にしており、第八代の名は空源くうげんあるいは空賢くうけん（文明元年〔一四六九〕〜享祿四年〔一五三一〕）とされる。もし西正寺の方便法身尊像に記された「空賢」が法泉寺の歴代ならば、元々最勝寺の下寺であった法泉寺が、長島一向一揆の拠点となる願証寺の成立後、本願寺の直参寺院となったと考えられよう。

なお、法泉寺の歴代で安田を名乗る者がいるが、正宝寺の安田山という山号もそれにちなんだものだろう。また、西正寺の山号竜田山は立田の西勝寺に、三宝寺の山号柳木山は柳堂にちなんだものだろう。長島一向一揆が敗北した後、鈴鹿郡に落ち延びたという伝承を伝える寺院もある。これは、以上のような桑名・長島を介した本願寺の本末関係に由来するのではなからうか。

その他の諸宗派 浄土宗や天台真盛宗をはじめとする諸宗派についても、この時期亀山市域に伸張し、江戸時代や現代の寺院の状況につながっていくと考えられる。しかしながら、同時代に記された記録から復元することは困難であった。今後新資料の発見を待つとともに、近世に記された寺院の由緒から遡及して考察していく努力も必要であろう。

第二項 織豊時代の寺社

福蔵寺と追善仏事

天正十一年（一五八三）

織田おだ信孝のぶたかの家臣で

あつた大塚長政が、今はなき主君の菩提を弔うため福蔵寺ふくぞうじ（天

台真盛宗）を建立した（史1005・1006）。大塚氏の名は瑞光寺の年

中行事並祠堂帳に天正元年（一五七三）の項に登場するが（史

849）、関に由縁のある者だったのだろう。また天正十七年（一

五八九）三月には関盛信が瑞光寺に父の追善供養のため寺領を

寄進し（史1088）、九月には寺領の書き立てを与えている（史1089）。

盛信自身も文禄二年（一五九三）に死去し、瑞光寺に葬られた

（史1121～1122）。

寺社領の寄進

この時代には土地などの制度が大きく変わり、

領主らと寺社が新たに関係を結びなおした。天正二十年（一五

九二）徳川家康が派遣した関の代官沢田清次さわだきよつぐが、瑞光寺に寺領

をあたえている（史1117）。慶長二年（一五九七）には、同じく

関の代官篠山理兵衛しのやまが、瑞光寺に寺領を与えている（史1146）。

篠山は関ヶ原で戦死するが、瑞光寺はその霊を祀っている（史

1166）。

伊勢神宮関係の寄進や領地の変化についてはすでに第九章第

一節三項・第三節第四項で詳述しているが、市域の神社にも寄

進が行われた。天正七年（一五七九）野村天王社に社領が寄進

されている（史908）。また、天正十七年（一五八九）には関盛

信の家臣岩間一貞いわまかずさだが、鈴鹿社（現片山神社）に寄進している（史

1091）。